統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

T 02
N 69
9

日本における統計学の発展

第 9 巻

話し手　柴田　武

聞き手　野元菊雄

統計数理研究所図書

1981年1月21日(水)

統計数理研究所にて

24958

24958

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

ま　え　が　き

1）この速記録は、昭和55、56、57年度文部省科学研究費総合（A）によるもので、研究者は次の通りである。

江見康一、丘本正、大屋祐雪、坂元慶行*、鈴木雪夫、竹内清、西平重喜*（代表者）、野沢正徳、広田純*、藤本熙、松下嘉米男、松田芳郎*、三潴信邦*、森博美*、山元周行（* 推進係）

2）インタビューの聞き手としては、研究者以外の方々のご援助を得た。その方々のお名前は、別巻を参照のこと。

3）この速記録の原本は、統計数理研究所図書室に登録保管される。そのほか、話し手と聞き手及び関係の協同研究者が保存する。

4）この速記録の利用に制限はつけないが、話し手、聞き手、研究代表者または推進係と話し合った後にされるよう希望する。

5）速記録を個人的に研究するため、コピーを希望する方は、代表者がコピーしやすい形で保管しているので、それを利用することができる。

以　上

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

野元　言語の統計的な処理といったら、リテラシイ（literacy）から出発するでしょうか。もちろんその前にいろいろな言語の……。

柴田　語彙統計がたくさんあったね。

野元　それから、学校の国語能力の調査とか、そういうものはもちろんあったわけですね。

　語彙の調査として有名なのはどういうものがありますか、日本だけに限って。

柴田　それは数を数えただけだけれども、垣内（松三）さんの調査とか、あるいは漢字については大西（雅雄）さんのがあるね。「基本漢字」とかいう本があるでしょう、あれは統計ではなかったかもしれない。それから、アルファベットの文字統計があるでしょう。ローマ字論者やかな文字論者の仕事が多かったようですね。しかし、そういうものは大抵平均値までしか出さない。まして標準偏差まで出すというものじゃない。単純に数を数えて多い順番に並べるといった式のもので、主として語彙の度数調査じゃないですか。心理学者が子供の言葉を対象にして表をつくったというのはあるわけでしょうが、言語の統計学ではないでしょうね。リテラシイもどっちかというと、教育研究所（当時は教育研修所、整理の段階で国立教育研究所になる）に本部を置かれたように、教育的な観点が入っているんでしょう。

野元　そうですね。

柴田　名前を思い出さないけれども、ＣＩＥ（連合軍総司令部民間情報教育部）の中に何とか女史がいたでしょう。教育心理学の権威だと思うのです。社会学者のペル

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

ゼル（Pelzel）よりも偉そうな人でした。
野元　これには書いてあります。（『日本人の読み書き能力（1951）』P. 32）
柴田　その人がこの調査の実際の理論的な指導者であったということから考えても、教育につながっていたんじゃないか。
野元　エドミストン（Edmiston）という人ですね。
柴田　全然名前は覚えてない、顔はよく覚えてるけど。ペルゼルよりも下に書いてあるんですけれども、エドミストンさんがこの調査を始める初期に2～3回私のところへ来て、根本方針についてずいぶん述べました。ペルゼルは完全にそれの聞き役でしたね。
野元　ペルゼルとエドミストン女史が来て打ち合わせたとこの本に出ている日記に書いてありますね。
柴田　それは何年？
野元　昭和23年2月2日。
柴田　じゃ私が仕事を始める前ですね。私が加わったのは4月1日付だったと思いますので。
野元　動きが始まったのがその前の年の12月ということになっていますね。
柴田　ですから、その動きについてはぼくは全然知りません。昭和23年の1月ごろに、こういう仕事があるからということで、ぼくは東大の助手の年限が来ていたということとあわせて、それでそちらに完全に引き移ったわけです。だから、その前の歴史は全然知らないのです。
　さらに、これは日本のローマ字化の根拠を探し求めるための調査ということも、仕事が終わるまでどこからもはっきりした形で出てこなかったですね。そういう話は、

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

密室ではあったかもしれないけれども、一応私のレベル——専門技術官という名前だったけれども、そんなレベルでは一切出なかった。ただ、最後にこういうことがあったんです。それはペルゼルが第一ホテルの狭い寝室に私を呼んで、報告書を何とか「リテラシイが低い」という線でまとめられないかということをいわれました。調査した結果そのままを報告する以外考えようがないと突っぱねましたが、おそらくペルゼルに上から圧力が加わっていたのでしょう。

野元　結局日本語は、漢字がむずかしいから民主化がおくれているという前提があるわけでしょう。

柴田　それはアメリカの教育使節団の勧告があった。その勧告を出したのには、ホールとかいう大佐か中佐がいて、それの働きかけがあったんでしょうけれども、それで実際に調査をしてみなきゃならないということだったのじゃないんですか。

野元　やっぱり漢字がだめだったら、一挙にやめてローマ字にしろと命令しないで、いかに日本人が日本語ができないかということを調べて、それからやろうとしたわけですね。

柴田　彼らはただ文盲率の数字さえ得れば、それでよかったんではないですか。それをこんなにめんどうな、また学問的なことを始めて、驚きもし、迷惑にも思ったんではないですか。だから、字が書けない人がたとえば80%というような統計的数字でも出れば、じゃあ漢字なんかやめればという発想だったんじゃないか。

しかし、われわれのところでは、全く学問的に、非常に詳しいことをやり始めた。その詳しいことをやり始め

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

た原動力は、城戸幡太郎にあったと思います。城戸さんのいろいろな考え方はいまだによく記憶していますけれども、一番象徴的なのは、テストに使う言葉を調べるために語彙調査をやりましたが、それをやろうとしたときに、お金はかかる、人手はかかる、しかも時間がかかるということが最大の問題で、どうしようかとずいぶん迷ったんです。すると城戸さんが、こういうことはやるときにやっておかないと、後できないよという、その一声でやることになったのです。

野元　確かにこれだけで、その後はこういう調査はないですね。

柴田　城戸さんのそのときの言葉はいまでも通ずることで、そのために時間的におくれはとらなかったし、論理的なつじつまはそれで合っているし、われわれ学者の満足感は一応この中で満たされたわけですね。このことは非常に大きいことだった。

そういうことは私はだれからも聞いていませんけれども、おそらくペルゼルか、あるいはもっと上のところの考えでは、こんな大きな報告書は期待していなかったと思います。戦後、われわれがそういう知的活動に飢えているときで、たまたま統計数理とか推計学が脚光を浴びていたものだから、これはいい対象が出てきたというわけで飛びついたというようなところもあって、結局やり過ぎたんじゃないですかね。(笑)

野元　これは間接には日本政府が出すわけですからね。

柴田　お金としては、GHQ(連合軍総司令部)か、CIEからですね。あれは教育研究所に一たん来てから出たのかな。そこら辺までよく知りませんけれども、身分

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

はＧＨＱの身分でしたね。
野元　そうですね。ここには（P.402）２月９日に文部省から40万円補助という話があったというのが出ています。あとはＣＩＥで保証すると務台（理作・教育研修所長）さんがいっているということです。当時の40万円だから大したものですね、昭和23年の初めですから。
柴田　しかし、それだけではとても足りない。おそらく給料はＧＨＱのものではないですか。結局は日本政府のものでしょうけれども、われわれにとって物すごくいい給料でしたね。
野元　いい給料でしたね。
柴田　野元君もらった？
野元　ええ、もらいましたよ。教育研究所でやっていたから、教育研究所で給料をもらっていた島津（一夫）さんとか……。
柴田　久保（舜一）さんとか。
野元　ああいう人に幾らもらっていると聞かれたから、「幾らもらっている」といったら途端に彼らは不きげんになった、そういう記憶があるんです。
柴田　島津さんは教育研究所の所員のままですか。
野元　所員のままだと思いますよ。
柴田　すると、そこら辺とはずいぶん待遇が違いますね。
野元　待遇はめちゃくちゃですね。不きげんになって、こっちは困ったことがありました。
柴田　これは後世に残す資料だからいっておきますが、金額は全然覚えてないけれども、その額がいかに大きかったかということについては、こういうことがあります。私は24年２月に国語研究所に入りましたね。

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

野元　半分以下でしょう。
柴田　いや、給料が6分の1になった。だから、いかに大きかったか、文部省の給料がいかに低かったか。(笑)斎藤正さんが国語研究所の庶務部長のときに、私の給料について申請をして、文部省からその査定があったわけでしょう。それを見て、斎藤さんが「6分の1だけれども、いいか」というわけです。任官してから、いいかといわれても、悪いともいえないですね。プロ野球の更新なら、そこでごねることができるけれども。1年間、6倍の給料をもらってやっていたんだから、生活的にずいぶん変な感じでしたね。だから、リテラシイ調査には大変な金をつぎ込んだということじゃないですか。しかし、島津さんとか久保さんには十分の手当がなかったとは申しわけなかったですね。
野元　同じところにいたんですけどね。
柴田　ぼくはそういうことは全然気づいてなかった。島津さんも同じ待遇を受けているものと思っていたんです。
野元　ここに(P.28～P.32)肩書きが書いてある人はそっち(いまの国立教育研究所)からもらっていた。肩書きが書いてない人はCIEから……。
柴田　じゃその機関から出てきてプロジェクトに加わっていたということですね。
野元　だけど、この調査は、理想的かどうかわからないけれども、準備調査から後の吟味調査まで実に丹念にやったということで、調査の一つの手本だと思いますね。それ以後はこういう調査は省略しちゃってやらないんじゃないですか。
柴田　後に文部省でやったけれども、なぞりですね。『国

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

民の読み書き能力』という報告書が出ていますね。
野元　しかし、あれは関東と東北だけですね。それから、若い人だけ。
柴田　しかもなぞりですから、あれ自身から特別のものは出てこなかったようですね。当用漢字表の効果を見たいということもあったらしいのですが、それには時期が早過ぎたということがあります。
　それにこれは、これ以後の社会調査の手本になったと思うのですけれども、最初に仮説をちゃんと立てていたんですね。私たちはこれを「憲法」と呼んでいましたね。
野元　英語から訳したやつでしょう。
柴田　あるいは「ペルゼル憲法」といっていたかもしれません。そこに書かれていることは、その当時の、少なくとも私にとってはずいぶん新しいことでした。つまりリテラシイ（literacy）という言葉は、英語の単語の意味では知っていたけれども、こういう意味では知らなかったし、またそれの定義が、ミニマム・エッセンシャルとは書いてなかったと思いますが、それと同じ考えで、「正常な社会生活を営むにぎりぎり必要な言語能力」というような定義で、いかにもアメリカ的な定義だと感じます。そういうような定義をした上で調査を企画し、実施したのですが、そういう考え方自身、それまでは必ずしも普通ではなかったんじゃないかな。まず調査をしてみて、後から何とかつじつまを合わせるというようなことだったのじゃないかなと思います。
　それに、林知己夫さんが少しおくれて参加した。4月じゃなくて6月ごろじゃなかったかと思う。最初は白石一誠さんという人からわれわれは統計学の講義を受けた。

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

途中から林知己夫という、これは何か経済統計学をやっている若い人だというふれ込みで、6月か7月ごろじゃなかったかと思いますが、彼が参加してから、チームに活気が出てきた。

野元　林さんは後から行って、白石さんが何もいわないから、やむを得ず前面に出てきたということのようです。

柴田　私は白石さんと林さんの関係は知らないけれども、6月ごろは林さんは、借りてきたネコのように静かな人でしたね。(笑) しかし、それから物すごく燃えてきた。林さんにとって、初めにある統計的な考えなり企画なりがあって、それを実施したというよりも、リテラシイという対象を前にして、調査をしながら統計的な考えを開発したんだと私は思う。だから、確率の林的定義というのがあらわれたのは、そのずっと後ですよ。

野元　水野(坦)さんはどうでした。

柴田　水野さんは、私は大して印象に残っていませんね。講義を受けたわけでもないし、ときに水野個人があらわれて何かいっていくというぐらいのことでした。水野さんは私の高等学校の先輩というか、同窓生で、前から名は知っていたのですが、このことについては、そんなに印象が残っていないですね。

野元　水野さんと林さんが論争しているのを聞いたことがあります。それは、パーセントを出しますね。そのパーセントを合計したところを100.0にするかしないかという、そんなくだらないことをやるものだと思って、驚いて聞いていたのですが、林さんはそろえて100.0%となるようにするという主張なんですね。

柴田　それはよほど後でしょう。

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

野元　これの整理の途中です。
柴田　だから、終わった後だね。そのときに水野さんが出てきたのかな。
野元　だから、この報告書ではパーセントの欄を合計するとみんな100.0になるようになっているんです。
柴田　水野さん、最初から出てる？
野元　最初からかどうかはわからないです。
柴田　組織の中に入ってる？
野元　入ってますね。だけど、資格はちょっと違いますね。林さんが専門委員で、水野さんは助手になっています。
柴田　水野さんとの交渉はほとんど記憶ないですね、やりとりも。林さんとはそれ以後、何というかお互いに刺激し合う同士で、林さんは、城戸さんに前にいったような根本的思想があるものだから、ともかく広げる、広げる、つまり貪欲的な調査をやったわけです。実際には林さんだと思う、そういう貪欲的にやったということ自身は。

野元　横須賀ですか、調査をよくやっていないというので差しかえをやったり、そういうところまで全部したんですね。
柴田　象徴的なのは小田原市のサンプル調査じゃないですか。あれは非常にいい調査でしたね。
　小田原を選ぶということについては、林さんが、あそこは社会的に多様なところで、サンプルをとるのにおもしろいところだ。つまり、邪推していうならば、林さんは、サンプリングということによっていかに小田原市全

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

体をよく反映するかというテストに小田原を使ったとさえ思えるところがあったんですけれども、実際は非常によかったですね。官様か何かが被調査者に当たっちゃって。林さんは最後まで、当然呼び出すべきであるとがんばった。最後は結局遠慮するということで、そこだけサンプルのごまかしを――それは欠席と扱えばいいわけですけれども。そのぐらい多様な都市でした。

いま思い出すことは、その当時、車というのはなかったわけです。アメリカ軍がジープを出してくれて、東京から小田原までジープで行った。珍しい経験であることと、足もとがいやに冷えたので、そのことはいまだに記憶に鮮明に残っています。何か特別な気持ちでしたね。（笑）

野元　私もジープにはずいぶん乗りました。横須賀にもジープで行った。10月31日、吹きさらしの最後の日でえらい寒かったです。11月1日にならないとわきのドアがつかないとかいって……。

それから、地方に出張するときに、特別に汽車に早く乗れたでしょう。

柴田　それはあまり記憶にないです。都竹（通年雄）君なんかそれを大いに利用した方でしょう。九州かどこかへ行って……。（笑）

野元　調査に行くときに、一般の人が乗る前に乗っていていいわけなんですね。中には通勤にアメリカ軍のための電車の車両に乗った人がいる。

柴田　その意味では米軍をかさに着たというか、利用したというか、あるいは利用されたというか、そういうことですね。そうでなければ、こんな全国民を一定の日に

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

集めるということはできない。こんなこと、将来もできないんじゃないですか。
野元　もうできませんね。国語研究所で調査したときに、上野・岡崎でやりましたでしょう。あのときは来た人に謝金を出していますね。
柴田　リテラシイでは何にも出してないでしょう。
野元　ええ、何も出してないですね。
柴田　渡辺紳一郎がサンプルに当たったんですよ。小田原の調査のときでしたかね。ちゃんと来てくれましたよ。
野元　来たという話は聞きました。
柴田　それで熱心に書いていました。それで一つ違っていたかな。(笑) 非常にまじめに、ひやかし気分ではなくて、来てくれた。私はその後あるところで渡辺さんに会ったことがあるのですけれども。タレントというイメージから受けるものと違っていて、尊敬すべき人でしたね。
　それから、統計数理的な考え方というのはいまや常識になってしまったでしょうけれども、その当時白石さんを通じてですけれども、いろいろなサンプリングの考え方を勉強したのは初めてでした。教育統計学という薄っぺらな悪い紙の本があるのですが、それがテキストだった。
野元　その本、私はいまも持っています。
柴田　無差別抽出とかなんとか、言葉としていやな名前が多かった。ストラティフィケーション(stratification)というそのこと自身がまだ新しい概念じゃなかったんですか。
野元　日本で全国的に適用したのは最初の方でしょう。
柴田　だから、林さんがリテラシイ・テストで層別をや

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

ったのは、みずから大いに評価するのですけれども、私はあまりその評価がぴんとこない。そういう考え方自身はすでにあったんでしょうけれども、それを実際に適用してそれなりの成果を上げたというのは初めてでしょうね。

野元　それから、いわゆるマル・バツ式のテストというのもそれまであまりなくて、これぐらいが最初じゃないでしょうか。
柴田　そのことはインストラクション、指示書にはどう書いてあったかしら。「マルをつけてください」と書いてあったかしら。
野元　「マルをつけてください」と、口頭でインストラクションしたはずですけれども。いまはイメージがよくないけれども、マル・バツ式というのはそのときが最初でしょう。
柴田　索引に出てる？マル・バツというのがもし索引にあれば、それは日本語として非常に早い時期ですね。
野元　マル・バツは索引にないですね。
柴田　マル・バツが始まったのは、もう少し後にアチーブメントテストというのがしばらくあったんですね。あれも教育研究所でやりましたね。私、ちょっと協力したのですけれども。
野元　そして、似たような語形を提示して、正しいものを選ばせるという方法、あれはだれがいい出したのですか。やっぱりアメリカでしょうか。心理の方ではずっとやっていたものなのか。
柴田　テストの内容や方法についてはエドミストン女史

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

もペルゼルも何もいいませんでした。ですから、われわれの間で考えたことです。
野元　われわれの間で考えたことですか。
柴田　そうです。だから、ことしの共通一次の問題と同じですよ。「栽培」の「培」というのに当てる候補の字に似た字が幾つかあって、正しいのにマルをつけるというか……。
野元　「木」が書いてあったり「衣」が書いてあったりするんですか。
柴田　共通一次はマルじゃなくて、あれは消すやつですね。もっと味気ないんですけれども。それはつまり、国民すべての人を対象にするのだからということでああいう形をとったんだと思う。
野元　結局、読み書き能力、たとえば単語の能力だったら単語の能力だけを純粋に取り出そうということですね。書く能力があまり影響しないようにということであったと思います。
柴田　日本の学校のテストというのは、漢字を書かせる、漢字に振りがなをつけさせる、それが普通のやり方だった。そういうことは一般の人を対象にはできない。それは島津一夫さんあたりのサゼスチョンだったかな。あるいは心理学者の梅津（八三）さんかもしれません。ともかくわれわれの中でそういう方法について決めた。
　それで、何回も準備調査をやっているんですね。学校でもやっているんです。それから、いまだに覚えていますが、霊友会に行ってやったんですね。
野元　小田原の調査とか、長浦。
柴田　大分忘れちゃったな。小田原はよく覚えているけ

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

ど。

野元　埼玉県比企郡野本村というのもありますね。

柴田　それは記憶ないね。

野元　千葉県君津郡長浦村。

柴田　それはちょっと記憶がある。埼玉県は全然記憶ないね。私は行かなかったかもしれません。

私にとってまる1年もなかったということでしょう。4月1日から始めて2月の末には国語研究所に行きましたから、極端にいえば正味10カ月ぐらいじゃないですか。その間に大ぜいの人でやったものの、その短い時期にわれながらよくやったと思うね。

野元　それは6倍もらっているんだから、よくやらなくちゃというか……。(笑)

柴田　しかし、給料だけではそうはいかないよ。(笑)毎日行ったし、それからコンピュータがないでしょう、計算機もないでしょう。

野元　計算機は、あのガチャガチャの回すやつです。

柴田　ガチャガチャだけれども、そんなに無数になかったですよ。それで、教育大学の学生を、あの当時アルバイトといったかどうか知らないけれども、教室に集めて計算を一斉にやらせたことがあるのです。

野元　そろばんですか。

柴田　そろばんだったり、筆算だったり。

そのときに、これは島津さんだったと思いますが、計算を100個やらせて1つのエラーしかなかったら、それはもう完璧だという、それをいまだに覚えています。そして毎日、20～30人いたと思いますが、教室のように並んで、どんどん仕事が進むわけです。それで、翌日の仕

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

ましたね。教育研究所の裏の和室じゃなかったでしょうか。それで、「もし終わってからソビエトが日本に来たら、諸君はアメリカの仕事をしたというのでやられるかもしれないけど、おれが責任者だから、ちゃんといってやるぞ」とかなんとかいって大みえを切っていました。

柴田　いまから思うと考えられないようなことを……。（笑）そのとき、江（実）さんじゃなかったですね。江さんはハルパンづきの担当官でしたから、こちらの仕事は河野さんだった。そういうわけで、30年前の日本の情勢というものをバックにしないと、いろいろな話は記録しておいても後世の人に理解がしにくい。

野元　それから、柴田さんが、日本語をローマ字であらわすという真の目的、下心があってこういう調査をやったのだろうというお話でしたが、柴田さん自身もローマ字論者だから、多少ローマ字になった方がいいと思っていたんじゃないですか。

柴田　それはいまでもそう思っています、根本は。しかし、このこと自身は、そういういわば「たくらみ」、もっとまじめな言葉でいえば、教育使節団の勧告があって、それに対応して日本がリテラシイを調べるということは、私は直接には知らなかった。ホールという人がいたというのは後で聞いたことで、その人は1回もあらわれなかったし、ペルゼルもそのことについて一言もいわなかった。

ただ、こういうことは私は2回ぐらい強く主張しました。解釈の仕方によっては私の考え方がそれからわかるのかもしれないけれども、分析をしたらいわゆる完全文

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

盲というのはきわめて少ないという結果になりましたね。それで、最初の「憲法」では、先ほど話したように正常な社会生活を営む上にどうしてもこれだけは必要な能力ということで、それに見合うような問題を出したんだから、われわれとしては、満点をとってくれなきゃ必要な能力を持っているとはいえない。そういうことを報告会でいいましたら、いまでも結城さんという人がいるでしょう。

野元　結城綿一さん。

柴田　あの人が一番強く反対しました。日本の文盲がそんなに多いということは現実に合わない。しかし、数字はこうだ。その定義からいってどうしてもこうだ。そのとき都竹君も発言権があったかどうか知らないけれども、都竹君も応援してしゃべりましたよ、同じ線で。その委員会はそれで終わった。

委員会には白石大二さんもいたんじゃない？そのときまだ釘本（久春）さんかな。

野元　釘本さんは最初はそうですね。

柴田　釘本さんは、私はあまり印象がない。白石さん、途中でかわらなかった？

野元　かわったかもしれません。第２回の国語課でこの調査の追試をやった（「国民の読み書き能力」の調査）のは白石さんの課長のときですね。このわれわれの調査のときは、文部省の関係事務官というのは、中央委員では釘本さんですね。

柴田　白石さんは後になってからかもしれませんが、ずいぶんその点を批判しましたね。完全文盲とか、不完全文盲も入れてですけれども、文盲がそんな比率だという

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

ことは、海外に知らしたとき非常に困るというような意味で、そういう結論を出したことには批判的だった。私は直接は聞かなかったのですけれども、友部（浩）君あたりを通じてそういう批判があることは知っていました。

最初は、完全文盲、不完全文盲という概念はなかったのです。文盲だけだったのです。それから、委員会でもめるから、満点というものに少々修正を加えた。満点とれるはずのところが、全くの不注意から間違ったというのを統計的に処理して、そういうものも満点としました。

野元　つまり、満点率を少しふやしたのです。

柴田　そうして多少修正しても満点率の数字はそれほど変わらないわけです。ですから、その新しい満点率がわれわれのいうリテレイトだとして、押し切った。私は、委員会で２回ぐらい相当それをやりました。やったというか、持ちこたえました。筋を通した。

野元　それだから、最後の打ち上げ会のときには柴田さんは大分荒れて、「ノン・コンクルージョン、ノン・コンクルージョン」といっていましたよ。ここでそういう結論を出せないのが非常に残念だったごとくでしたね。

柴田　その打ち上げ会のことは全然記憶ない。そういえば教育研究所の裏にありましたね。木立の中にあった。

野元　青島中学か何かの下だった。

柴田　しかし、その模様のことは一切記憶にない。

それが終わって、さきにお話ししたことですが、ある日突然ペルゼルから電話がかかってきて、「ちょっと話をしたいから第一ホテルに来てくれ」というのです。第一ホテルは彼の宿舎なんです。そして「自分の部屋に来てくれ」というので、部屋へ行ったんです。第一ホテルは、

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

いまはどうか知らないけれども、実に狭い部屋なんですね。ベッド一つあって、もう身動きできないのです。いす一つ置けない。もっと大きい部屋があるだろうけど、ペルゼルはそういう部屋だった。そこでおそらくベッドに腰をおろしながら2人で話したんです。

そのときのペルゼルの言いかは、はっきりはいわなかったけれども、何とか結論を曲げてくれということなんだな。ペルゼルは、文盲が非常に多いというふうにやってくれなきゃ困るというわけです。そういうふうにはいわないんだけれども、はっきりいえばそういうことです。

しかし、私は、「それは調査をして出てきた結果なんだから、それを曲げることはできない」といった。そうしたら、「そうだろうな」というような調子で、5分と話をしなかったと思うけれども、きっとペルゼルは、CIEの中でそういう圧力を受けていたんじゃないですか。つまり、期待に反した結果を金を使って出したわけですから。それがペルゼルに会った最後じゃなかったかと私は思うのです。

野元　それは「ノン・コンクルージョン」といったときの前ですか、後ですか。

柴田　それはわからない。打ち上げのことは全然覚えてないから。そんなにいうなら、初めから調査をやる必要ないじゃないかというような気持ちじゃなかったかな。

しかし、調査をしていた都竹君は積極的に発言しましたね。林君も、自分は専門外だというような顔はしているものの、サンプリングをして全体を反映しているという信念はあるわけだから、曲げない。ですから、実際の調査グループは全員そういう考えだったと私は思います

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

が、委員会は必ずしもそうじゃなかった。だから、私たちの方に味方するような積極的な発言は記憶にない。黙っているというのは賛成だろうとは思うのですけれども、積極的に結城さんに反論するという人はいなかったように思うのです。しかし、結城さん以外は好意的ではあったと思うのです。あるいは無関心か、どっちか。結城さんは終始反対していましたよ。

野元　石黒さんはどうでした。あまり印象ないですか。

柴田　はっきりしなかったですね。石黒さんがいうと少し変わってくるし……。ですから、それを少し手心した方がいいんじゃないかということは、石黒さんは私に一切いわなかったですね。終始黙って見守っていくということじゃなかったですか。

それに石黒さんについていっておかなくてはならないことは、このことは私だけじゃないと思いますけれども、3月には私は東大をやめたでしょう。いまから思うと、やはりいろいろな会計的な処理があったんでしょう。4月から仕事を始めても、4月に給料が出ないんです。5月にも出たかな、ともかく1カ月か2カ月ぐらい給料が出なかったのです。だから、石黒さんが、困るだろうからということで、その当時の給料に見合う――6倍まではなかったと思うけれども、ある程度のあれを工面してくださったことがあります。それは私だけじゃなくて、ほかの人に対しても、おそらく北村（甫）君なんかに対してもそうじゃなかったかと思うのですが、そういうケースはときどきありましたね。お金はたくさんありながら、こういうふうにうまく……。

野元　うまく転がらないときがあるんですね。

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

柴田　きっとその一部分文部省で、一部分はＣＩＥだということがあるのか、よくわかりませんけど、ともかく十何日に必ず給料が出るという出方じゃなかったです。そこのつなぎを石黒さんはいつも気を使ってくださった。そういう役割りは非常に大きかった。

それから、城戸さんとの関係が非常に強かった。城戸さんは気持ちが若くて、やんちゃな青年みたいなところがあるから、それを石黒さんのところで適当におぜん立てしてやる、そういう関係だったと私は思います。だから、石黒さん自身は、仕事の内容そのものにもそんなにタッチなさらなかったと思います。こういうことを調べた方がいいとかなんとかいうこともね……。

野元　そういうことはあまりなかったですね。整理の段階でもなかった。

柴田　そういう主張をしたいときでも石黒さんは黙っていらしたと思います。反対はもちろんしない。そんなことが非常に強い印象として残っています。

私は、国語問題というテーマ自身に興味を持っていたから、やらないかということでやった。事柄自身が全部新しいことだった。そして概念そのもの、それから統計学というものに接したこと、その２つが非常に大きいことだった。それから、準備調査をするとか吟味調査をするとか、全部新しい経験だったので、何か好奇心に駆られて、高給をはみながら好きなことをやったという、10カ月の夢みたいなものじゃないですか。悪夢か良夢か知らないけれども。

野元　その夢まだ覚めやらずで、国立国語研究所に入ってからまた続くわけだけれども、やっぱりこれがあった

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

からああいうことになったわけですね。その辺の話も……。

柴田　私個人としてそういうことで、いま社会言語学という名前になっているけれども、具体的な発端というのはそれですね。私はそれをやるまでは、トルコ語の古いところをやっていたんです。あるいは戦争が終わるまでは、トルコの暗号を解く仕事を軍からやらされたりしてました。

だから、その当時私は言語社会学というのはまだよく知らなかったから、ペルゼルは社会学者だということで、彼に聞いたことがあるのです。その時分まだソシオリンギスティックス（sociolinguistics）という名前さえなく、言語のソシアル・スタディーもなかった。日本に田辺寿利の『言語社会学序説』という本があるといわれたけれども、これは「社会言語学」でも「言語社会学」でもない。ペルゼルがこれを勧めたのも、いまから思うと、彼は読んでないのに、本の名前だけから挙げたんではないかと思うのです。

野元　あれはいまいう言語社会学じゃないですね。

柴田　あの本は私はその前に読んでいましたから。あれはダルムステッドという人の本の要約みたいなものですね。それは俗語とか隠語を扱っているというだけで、社会言語学として期待される内容は何もない。アメリカでは社会学の方でヤングという人がいたということは教えてくれたが、それ以上の情報はくれなかったのです。

だから、その当時からそういうものを模索していて、国語研究所という新設の機関に勤め口ができた。ここは芽を出しやすい土壌があって、たまたま方言というか、

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

話し言葉というか、そういう研究を担当することになり、方言と標準語の関係を社会言語学的に調査したわけです。それは私の中の一貫した流れだと思うのです。それを岩淵悦太郎部長という人にめぐり会って、よくバックアップしてくださった。

野元　結局、それまでの国語学というのはずっと古いところが主流であったわけですね。現代語の研究はあまりなかった。しかし、いま目の前で生きているものを研究するということは、言語の実態をとらえる、つまり言語というのは何であるかということを調べるためには重要であるということですね。それはやっぱりこういう調査を通じてだんだん……。

柴田　現代語の研究というのは国語研究所全体の大きなテーマだったわけですね。だから、少し偏らせていうならば、社会言語学の方法で何が研究できるかということで、その観点からテーマを探したといういきさつは否定できません。別に方言と標準語の関係をやらなくてもよかったと思うのですが、所属した第一研究室が話し言葉の研究だったんです。方言と標準語の関係について調査した後は、敬語がそういう研究に向く対象だと思いましたし、いまでも思っているのです。敬語というものは、社会言語学でない方法でやったってなかなか成果は上がらないと考えています。だから、方法があって対象を探したということがあったんです。

野元　日本語には、体系の異なる二言語使用というのはないわけですね。アメリカの社会言語学はそういうおもしろい対象があると思うのですけれども、日本ではそれ

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

に一番近いのが……。

柴田　アメリカのニグロのイングリッシュね。階級か階層か知らないけど、階層の差と言語差の関係というおもしろい、しかも深刻な問題がある。日本はそんなものはないといっていい。

野元　日本はまずないでしょうね。いわゆる被差別部落も、言語は全然違わないでしょう。

柴田　あるとしたら、皇室とそれ以外ぐらいじゃないですか。皇室はどうなっているか知らないけれども、違うらしいということはわかる。案外同じかもしれない。

野元　皇室の言葉も同じじゃないですか。

柴田　私、1回だけしか経験ないけれども、皇太子殿下、美智子妃殿下――天皇は知らないけれども、お使いなさる言葉は、伺った限りではそんなに変わらないね。

野元　変わらないですね。個人的なくせなんでしょう、天皇の言葉は。

柴田　小さいときだれかが教育したんじゃないの。

野元　とにかくそういうことで、方言と共通語ということであれば、二言語使用を拡大してみればこれがテーマであったということですね。

柴田　つまり、人間と言語の相互関係を見るというテーマとしてうってつけなわけですね。これは言語の能力と人間との関係を見ている。それまでは言語を人間的要素で説明しただけだったと思うのです。そうじゃなくて、両方立てておいて相互の関係を見るということですね。だから、林さん、西平（重喜）さん、石田（直次）さんも入っていたと思うけれども、そういう人を研究所の仕事の協力者として迎え入れたということは、人間的関係

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

から見れば全くリテラシイ・テストの延長ですね。島津さんこそいなかったけれども。
野元　いや、いましたよ。敬語の調査のときには共同研究者になりました。
柴田　そうそう、パーソナリティーのテストのことでね。だから、それは本当にいまから考えると……。
野元　同窓会ですね。(笑)
柴田　何か引き移ったような形で、じくじたるものがあるわけですけれども……。
野元　しかし、調査というのはやる人が大切だから、そういう人脈はしょうがない。
柴田　気心が合わなきゃできないし、また、気が合う人は合うようになるわけですね。けんかする人はまたけんかするようになるかもしれない。
　しかし、後で野元君が報告書をどんどん書いてくれたからね。あのとき妙なページが打ってあったね。二進法じゃなかった？
野元　いや、そんなことないです。
柴田　まともなページじゃなかったと思うよ。
野元　二進法はコンピュータでしょう。これはまだコンピュータがなくて、せいぜいIBMのビジネスマシン、パンチカードですからね。
柴田　ページが808で終わって、すぐ901になっている。
野元　なるほど、なるほど。
柴田　ここを見て総ページ九百何ページだなと思ったけれども、実はそんなにないわけです。
野元　それは多分私がやったんでしょう。だけど、それは必要に迫られてやったと思いますよ。

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

柴田　後から変なのが入るかもしれないというので……。
野元　そこで切っておけば、そんなにたくさんは延びてこないだろうという何かあったと思いますよ。
柴田　だから、このページ数を1冊の本の総ページ数と見ると間違いになる。
野元　こういうのはその後の本にはないでしょうね。
柴田　しかし、よく東大出版はこれを出しましたね。あなたの個人的な関係があったせいかしら。
野元　あのころ、戦没学生の手記で儲けましたからね。
柴田　いまや彼は偉いんでしょう。
野元　トップですよ、石井（和夫）君でしょう。
柴田　だから、これを出したときには損はしなかったんでしょう。
野元　なかったと思います。
柴田　こんなもの出してといって、茅（誠司）さんか何かが反対したんですか。通すのに相当苦労したらしいですね。東大出版として2冊目とか3冊目とか、実に早い時期でしょう。
野元　そうです。
　それから、いまはこんなことをする人はいないだろうけど、福永（昭）君に表を全部書いてもらった。福永恭助さんの息子さん。
柴田　彼は建築士だから。私は彼に家を建ててもらった。あのころはまだ東大の建築学の学生だったんです。
野元　建築の学生だから、こんなきれいな字で書いたわけですけれども。
柴田　まだときどき会いますけどね。
野元　うちの隣の隣の隣の家の親戚の娘さんが福永君の

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

奥さんだとか何か聞いたことがある。
柴田　その奥さんのことは私は全然存じませんけど、まだ鎌倉にいるんです、前のお父さんの家に。
野元　表の番号のつけ方とか、こういうのはやたらにこりましたね。
柴田　それは野元君だな。それは私の関与せざるところだ。(笑)
　調査が終わってから1年ぐらいやったんですね。
野元　本だけに1年ぐらいかかりました。
柴田　24年度いっぱいやって、25年の秋ぐらいに出ているの？
野元　26年ですね。
柴田　だから、24年から1年かかって、出版に10カ月ぐらいかかっている。
野元　柴田さんが国語研究所に入ったのは24年2月、私が入ったのが25年12月ですから、その間本をつくっていたわけです。
柴田　でなければ、調査をやっても、本を出さなきゃいけないということないですからね。石黒さんの本(『日本人の国語生活』東大出版部　1951年)の方が少し早く出ているんですね。だから、場合によってはあれだけでも米軍は何もいわないし、文部省も何もいわないから、これは全く執念でやったようなものですね。
　それで、東大出版会が乗ったものだから……。東大出版会というのはそのとき初めて聞いた。
野元　当時は出版部といっていたのです、いまは出版会ですが。
柴田　東大がアメリカの大学のまねをしてそういうこと

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

を始めたんでしょう。
野元　南原さんが、「ユニバーシティー・エクステンション」とかなんとかいって、その一環として……。
柴田　そのときにそれを持ち込んだら成立したというから、まあのんきな時代だったね。いまだったら、文部省の刊行助成費をもらって出すというふうなことでしょうね。
野元　そうだと思いますね。これが(『日本人の読み書き能力(1951)』)昭和26年に1800円。
柴田　しかし、そういうふうに徹底的に資料を残したいという気持ちは、やっぱり若い者のある気持ちじゃないですか。
野元　きっと荻野(綱男)君なんかはそうでしょう。
柴田　東大の今度の計画は、私はお金の工面だけしたんですけれども、ある意味でひそかにほほ笑むところがある。コンピュータが入っているという点が違うだけで、何でもかんでもまとめておこうという気持ちは、かつてのわれわれと同じですね。ああいう気持ちになるんですよ。
野元　しかし、それ以後の報告書にあまりそういうのがなかった。それどころか、ちょっとぐあい悪いところは伏せたり何かするわけですね。ことに経費をどういうふうに捻出したかとか、アルバイトをどういうふうに使ったかということまでこれは出ていますからね。
柴田　それは、もっと後になって、そういうことの分析に耐える資料かもしれませんね。
野元　ただ、問題とか答案用紙とか、そういうものがなくなっちゃった。

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

柴田　物が……？
野元　それは教育研究所にあったはずだけれども、いまはもうないようです。
柴田　あるとき、国語研究所のどこかに移せばよかったね。
野元　移せばずっととっておいたと思いますけれども。
柴田　いまだったらマイクロ化できるんじゃないですか。
野元　それで、これに1000のサンプルがありましたでしょう。それのカードはあるけれども、カードの読み方がわからない。コード表がないんですね。
柴田　30年たつとそうなるね。
野元　だから、ちょっと残念ですね。
柴田　大変な物量だったでしょうから。
野元　物量は大変ですよ。
柴田　そんなもの持っていったら教育研究所が困るよ。
野元　あれは何枚でしたか。6枚――もっとですか。
柴田　4枚ぐらいか。大きな字でしたから。
野元　縮刷だけども、これに出ているんですね。6枚ですね。ちゃんと寸法まではかってあります。これは私の字ですね。
柴田　これはもとはだれかに書いてもらったんですか。
野元　これは満田（新一郎）さんが書いたという話を聞いています。
柴田　満田君がいたね。黙々と仕事してくれる人でしたね。心理学者の知恵から出ているものもありますね。言語学者だったら考えつかないような……。
野元　サイコロの目で一つ目、二つ目ということを検定する……。

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

それから、次は四角の一つのところですとか……。

柴田　それはやっぱり心理学のあれですね。われわれは、内容の方を担当した。問題として出す字を選ぶのに何回も準備調査をして、1人でも誤答があるものでないと取り上げなかった。

しかし、そういうふうな手続をしてリテラシイを調査したものは、おそらくいまだに世界にもないですね。

野元　こういう手続をしたのはないでしょうね。

柴田　だから、厳密にいうと、比較する資料はないわけですね。大体外国のリテラシイというのはみんな国勢調査か何かで、「字が書けますか」とかいう質問があって、イエス、ノーで答えたようなものでしょう。

野元　それから、学校に通った年数で判定したり。

柴田　そういう間接的なものでしょう。だから、非常に怪しい数字ですよ。

野元　だから、戦争後、あんなに物がないころ、こういうのを始めたというところにその後のいろいろな発展のあれがあるのかもしれない。

柴田　物がないからできないんじゃなくて、社会的な一つの熱気があったんじゃないですか。

野元　復興精神の一つですかね。

柴田　やっぱり戦後というあの時代の空気じゃないですか。だから、コンピュータがなくてもできた。いまコンピュータがあっても、1年でこれだけの仕事はできない。

野元　できないと思いますね。

柴田　やればできるかもしれないけれども、テスト自身は絶対できないですから。

野元　これだけのデータを本にするというのは、いまお

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

そらくこの時間ではできませんね。
柴田　それから、印刷だっていまはもっと時間がかかるんじゃないですか。おそらく原稿を渡してから1年かかると思う、よほど特別な事情がない限りは。
野元　そういう点ではこれは空前絶後のものであるかもしれませんね。
　そういえば確かにページ数はおかしいな。ここで70ページも飛んでいる。(笑)
柴田　しかし、もう40歳以下の人だったら、専門家でもここに書いてある事実を知らない人が多いんじゃないですか。
野元　そうでしょうね。
柴田　だから、私の前後の年代、たとえば金田一(春彦)さんは私のちょっと上の年代ですけれども、ああいう年代の人には思い出として……。
野元　金田一さんはここに(P.29)名前が出ています。
柴田　それは記憶の中に一生残るのですけれども、それ以後の人、ですからいまの40代の人は知らないんじゃないかな、言語学会、国語学会の会員は。
野元　知らないでしょうね。ただ、岩波講座『日本語』3の『国語国字問題』(1977)で、柴田先生の命令で私が書きましたね。あれがこれに関する一番新しい紹介ですけれども。
柴田　そんなことあったかなというぐらいのもので、ほとんど知らないんじゃないかと思いますね。それに、国民の文字の読み書き能力がどの程度あるのか知りたいとか、そういう関心はないんじゃないですか。問題として存在しないと思う。アメリカ人だからそういうことを問

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

題にしたので、われわれ自身がこういう計画をするというのはないと思いますね。
野元　そうでしょうね。
柴田　だから、アフリカの途上国へ行ってこういう計画をするというのは、問題として存在するから……。
野元　どうですか、ひとつ。(笑)ファイトないですか。ユネスコあたりで計画しませんかね。

柴田　それからもう一つは、いま日本の読み書き能力がこれよりうんと上がっているとみんな思っていると思うけれども、私は非常に疑問に思っている。
野元　だけど私は、当時の年とった女の人が死んじゃったから、その分上がっているんじゃないかという気がしますよ。
柴田　確かに完全文盲はなくなっている。身体的な故障のある人は別だけれども、全体的なレベルとしてどうだろう。たとえば、ここに出ている問題自身にもう回答できなくなっていると思いますね。だから、現代の必要にして十分な能力というものを見る問題がもしできたとしたら、どうだろう、これと同じレベルまで行くかしら。
野元　これは七十何点でしたか、このときにぐっと落ちていたのは年とった女の人ですね。
柴田　その後、教育というものが普通に来ていると思っているでしょう。一番問題は漢字を書く能力でしょう。そこのことを考えるとどうかなと思うね。
　たとえばアフリカなんかでも、リテラシイが落ちているそうですね。人口がふえて、それに教育が伴わないから、数字としては落ちている。

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

野元　また、電波コミュニケーションのために、書く生活、読む生活というものの相対的な地位が下落したでしょう。そういうこともあるかもしれません。
柴田　読むことは、まだいいと思う。読むというのはぐっと上がっている感じですね。しかし、書く、ことに漢字ということになったら――かたかなも多少怪しいけれども……。しかし、漢字についてはどうかな。
野元　手紙を書かなくなって、電話で済ます。
柴田　私はちょっとそれを疑っている。
野元　きのうから郵便料金が上がって、ますます……。
柴田　どうしてそういうことをいうかといいますと、田舎の小学校の先生から手紙をもらうんですが、ちょっとひどい手紙があるんですよ。ことに沖縄なんかの小学校の先生からの手紙にそれが多い。というのは、戦後のどさくさで先生になってしまったというようなことじゃないかと思うけれども、教える側にもそういうことがありますね。

それはごく少数の例で、全体のパーセントを下げるほどではないかもしれないけれども、急に上昇しているとは決して思えない。そういう意味では読み書き能力というものが問題として存在するのです。再びこういうことはできないけれども、できるとしたらぜひやって、戦後の様子を知りたいですね。もし、能力が落ちたというような結果が出れば、普通の人は、当用漢字にしたから落ちたという解釈をするでしょうね。(笑)当用漢字にして、漢字を教える数が少なくなったし、漢字なんかどうでもいいというような風潮をつくったから、それで漢字が書けなくなったんだという解釈をするのが普通でしょう。

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

野元　そうでしょうね。
柴田　それで、今度ふやすから、また30年もたってもう一回やったらどうなるか。この当時は無制限に漢字を教えていたんだから――もちろん義務教育では無制限じゃなくて、あの当時は幾つ教えたんですかね。
野元　もう当用漢字は出ているんですね。
柴田　出ているんだけれども、それを習った人は被調査者には一人もいないんだから。
野元　本調査に付随してやった学校調査の調査者は当用漢字、現代かなづかいで教育され始めたわけですね。だけど、もう少し前まではそれがなかったですから、ほとんど当用漢字は関係ない。
　それで、当用漢字が関係するかどうかということを私は文部省の次の調査では思ったわけですけれども、それはほとんど関係ないことがわかった。あれも、この『日本人の読み書き能力調査』があったから何か引きずられてやったわけで、あの報告書（文部省『国民の読み書き能力』大蔵省印刷局発行　1961年）もこれ以上に詳しいですね。とにかくこの『日本人の……』と同じ版型で2段になっていて、これより小さい字でずっと書いてあって、あれも友部君らしいやつなんですけれども……。
　でも、あれとこれとを比べようと思って両方読み比べても、なかなかうまくマッチしません。問題が違うということと、それから、やっぱり年齢が違いますでしょう。つまり、新しい方の国民の読み書き能力調査では、もうかなはわかっているものとして出してないわけです。だから、まずその点で比べられない。
柴田　当用漢字のあれで少しやってみるとおもしろいと

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

思いますけれども。
野元　やっぱり当用漢字、常用漢字じゃなくて、柴田さんはまだ――まだというのもおかしいけれども、ローマ字論者ですね。
柴田　簡単にいえばね。
野元　実際的には……？
柴田　実際にはできませんね。定年でもうやめた男だもの、何もできないよ。(笑) 小さいことだけど、索引で「文盲」をbunmô と書いてあって、いつか野元君にそれを指摘したことがあるんですよ。記憶している？おかしいと思っていたら、池田弥三郎さんもbunmô といったんですね。そのことはどこかに私は記録してある。君のははっきりローマ字なものだから、あらわに出ているわけだ。
野元　bunmô はmonmô を見よとなっているのです。矢印で→monmô となっています。
柴田　そのとき私は、bunmô という読み方の存在を知らなかった。野元君はそのとき、bunmô じゃなかったの。
野元　だったかもしれませんね。
柴田　それなら問題ないわけだ。bunmô で出ていたので、私はそれを野元君にいったことがある。それで私はびっくりして、それから気をつけていたら、池田弥三郎さんが口でいったのだったかな。これは東京かなとも思ったんだけれども、そうじゃなくて……。
野元　東京じゃないです。それで、都竹さんに私はbunmô だといったら、彼は私と話をするときはbunmô というのです。あの人らしい。(笑)
柴田　通じないと思って……？
野元　通じないと思ったのかどうかわからないけれども

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

……。

柴田　確かにbunmô という人はほかにもいると思います。ただ、あまり話題にならない言葉ですから。昔は「明き盲」といったわけですけれども、いま差別語になるから使わないでしょうし……。

野元　要するに「盲」という言葉をそういうふうに使うことについては、やっぱり怒っているのかもしれない。盲ということは、それがわからないという意味でしょう。文章がわからないという意味。

柴田　命名側に差別意識があるわけでしょう。じゃ、不識者とか無識者とかいえばいいんだな。リテラシイを「識字能力」と訳す人もいるでしょう。

野元　だけど、そうすると書く方が入らないような感じがしますね。

柴田　そう。「読み書き能力」という訳についてもずいぶんもめた。ですから、おそらく憲法は「リテラシイ」と書いたんじゃないの。

野元　憲法はここに入っているかどうか……。

柴田　それはもちろん入ってる。話としては一番最初ですね。

野元　「Literacyの概念」(P.3)。

　いつも「リテラシイ」といって、「読み書き能力」というのが使われていたのはこの本にするときですか。

柴田　後の方ですね。

野元　リテラシイでは売れないということは確かですね。

柴田　もちろんそれでは本になりませんね。いまだって「リテラシイ」という言葉は普通ではないですね。

野元　「Literacyは常識的に、'読んだり書いたりする

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

能力'というように考えられているが、そのような定義では科学的には不十分であると思われる。しかし、今までにliteracyが科学的に定義されたことはない。」(P.3)

柴田　これが、エドミストン女史の文章の翻訳です。これは「憲法」と称するやつです。

野元　それで、そのリテラシイを柴田さんはよくかたかなで書かれた。「リテラシイ」と「イ」は入れないで、「リテラシ」と書いたような感じがするんだけれども、そんなことないですか。

柴田　その記憶はない。

野元　それからもう一つは、里程君はいつ生まれたんですか。

柴田　24年の2月です。

野元　じゃ研究所に入ったころですか。

柴田　研究所は24年の2月28日、里程が生まれたのは2月4日だから、そのちょっと前です。だから、まだリテラシイ・テストのチームに身分が形式的にはあるころです。

野元　とにかく、名前を里程という名前に……。

柴田　リテラシイから里程としたわけです。いま30里程ぐらいですよ。(笑)

柴田　ここで統計的なあれは、ただサンプリングということですね。サンプリングで全体をつかめるということじゃないですか。サンプリング、理論的にはよく母集団を代表するということがいわれていても、実際にやってみたらどうかという、そのことの実験で林さんなんか、大丈夫だといったわけです。

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

だから、いま林さんに届けようと西平さんに持っていってもらったものもそれに関係があって、今度朝日に名前の調査の結果が出ていたでしょう。

野元　世論調査じゃないですか。

柴田　朝日の世論調査の対象者の名前の統計。それを、私は朝日読んでないものだから、林君からある晩電話がかかってきて、リテラシイのサンプルを使って私がやったものがあるわけです、昭和25年ごろに出したものが。それをコピーしてくれというのです。それは非常におもしろいもので、簡単にいうと、それまでの研究ですね、惣郷正明という人の学士会の名簿とか、それから佐久間英という人の、あれは大体地方公務員の名簿で、電話帳が主ですけれども、そういうもので調べると、トップが鈴木、2位が佐藤なんです。ところが、これでは(『日本人の読み書き能力』)佐藤がトップで、鈴木が2位なんです。今度の朝日も、佐藤がトップで、鈴木が2位。

ところが、3位に朝日は高橋が出ているのです。このリテラシイでは、3位は田中か山本か、ともかく高橋は6位ぐらいなんです。復員局というのがあって、復員者名簿を私、どういう関係だったか、教えてもらったものがある。それは素数を聞いてなくて、ただカードの厚みだけを教えてもらったんですが、佐藤、鈴木、そして第3位に高橋です。

だから、われわれのサンプリングは、もちろん人名のサンプリングじゃないんですけれども、1位、2位というところはこれでも十分にいけるわけです。朝日みたいにあんな膨大な人をサンプリングしなくても合っている。しかし、3位になるともうこれでは勝てない。これは層

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

別ですから、どこかの村をとれば……。
野元　一つがばっと出て……。
柴田　ですから、どうしてもそこに偏りが出るという意味で合わない。
　そのことは、全国では佐藤が1位である。少し偏ったというか、有識者というか、学力の高い人というか、そういう人の名簿――名簿は大体そういうものが多いですから、それによると鈴木が1位なんですね。ところが、保険会社なんかは佐藤がトップです。ときどき新聞に出てますが、いつも佐藤が1位ですね。
野元　それは佐藤が東北ということ、それが背景になっていますね。
柴田　東北で稼いでいるわけです。東北が全体的にいって学歴が低いことと関係があると思います。
野元　そういうことからいえば、一番最初に新聞の語彙調査をしましたでしょう。1位が「する」であるということもこれですでに出ているわけです。いま幾らやっても全部「する」ですね。
柴田　「する」必要はないわけだ。(笑)
野元　「する」「いる」そういうのが上に来るというのは、この調査でも出ている。
柴田　それまでは語彙調査でわかっていたのかな。
野元　いや、わかってなかった。こういう関係ではないんじゃないですか。
柴田　名詞は何かしら。
野元　名詞は「会社」ですね。
柴田　「委員」なんかまだ出てこない？
野元　「委員」は出てきませんけれども、「組合」なんと

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

いうのが出ている。とにかくたちまち度数が2ぐらいになっちゃうんですから。
柴田　それはサンプルが少ないから。
野元　非常に少ないですね。それでも「する」は1番。
柴田　「する」の次は何ですか。「株式会社」か。
野元　朝日はどうだ、何はどうだと……。
柴田　ちょっと詳し過ぎるね。
野元　詳し過ぎますね。これはちょっと遊んじゃったみたいな……。
　すごいですよ、毎日、朝日、読売、中部、北海道、西日本、中国、河北、日経、人民、東京、第一……。
柴田　第一ってあったかね。私は記憶ない。
野元　「委員」も相当多いですね、29。
柴田　これは2位という意味ですか。もっと多いのは多いでしょう。
野元　多いのは多いですよ。これが政治関係のところです。
柴田　国研でやった最初の調査は「委員」でしょう。これは民主主義の反映ですね。戦前だったら「委員」なんか出てこない。
野元　こんないろんな新聞をよくやりましたね。
柴田　人民新聞なんてどういう新聞か知らないけれども、やっぱり共産党の新聞でしょうね。
野元　赤旗がないから。
柴田　赤旗はあったでしょう。でも、日刊じゃなかったでしょう。
　語彙調査の細部については、都竹君がずいぶんやったんじゃないかと思うのです。こっちはテストワードを選

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

ぶことが第1目的だったから。
野元　当時の用紙割当量なども出てますね。
柴田　それで選んだんじゃないの。
野元　高畠(平)君というのが東大の言語を出て、用紙割当委員会にいた。(笑)
柴田　何か華やかにやったんでしょう。

野元　あと、国語研究所において統計を使った話の思い出か何か……。
柴田　思い出というか、さっきいったこと以外、つまりそういう方法を用いることのできる対象を探して、方向を一層確認したというような気がします。
　それから、方言と標準語との問題は、岩淵さんが非常に熱心にバックアップしたということで成立したんじゃないですか。それから国語研究所の設立の目的、言語生活の何とかということの私なりの受けとめ方はあったので、それをただ理屈だけでなくて、実際に何らかの形で具体的な資料にしていったということですね。
　だから、自分として本当にやりたい研究がああいうものだったかどうかということは多少疑問ですね。つまりこういうものがなくて、全く純粋にということはあり得ませんけれども、研究所の目的に合い、自分の好きなことをやるということだったら何をやっていたか、ちょっと自分でもわかりませんね。
野元　国字問題。平井(昌夫)さんのやっていたようなことではない。
柴田　平井さんは国語教育でしょう。あのころはアメリカの国語教育の紹介みたいなことをやりましたね。

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

最初は、中村（通夫）研究室で東京語の調査というのをやったんです。あれは簡単な数字が報告されていますけれども。

野元　年報に出ている。

柴田　ですから、中村さんの中の研究のイメージはああいうものではなかったかなと思うのです。ただし、あのころは白河の前に八丈があるわけです。「八丈はおもしろいところだからやるべきである」と中村さんのサゼスチョンがあった。それで、望月誼三という人が前に東大の国語国文学科に卒論を出して、八丈はおもしろいということで、私は八丈をやった。そのときは統計的な方法は用いてないのです。ただ言語形式に人間のレッテルをつけた。男がいったか、女がいったか、そういうことをやったという点では多少ソシオ・リンギスティックな芽は出ていますけれども、本格的なものじゃないですね。方言があまりにも著しくて、それに振り回されちゃっていますから。

しかし、遠藤嘉基さんは、あの八丈の報告書は非常に買ったんです。どういう人が使う言葉かとか、そういうことがある。それで、学士院だったか、日本人の業績を英文か何かにして毎年出していましたね。どこが主宰だったか、各学会から論文を一つずつ推薦して出しているでしょう。

野元　英語か何かで出すのですか。

柴田　最後は英語になるのです。いまもあるんじゃないかと思う。それは学会から一つずつ論文を出す。そして、文部省だろうと思いますが、それをまとめて本にして、最後に英語に訳して海外に知らせる。そのときに、八丈

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

の言語調査については遠藤さんだと思います、推薦したのは。

遠藤さんは、『日本霊異記』か何かやっている方だけれども、そういう関心があったわけですね。そのバックに岩淵さんという人が方言というものに関心を持っていた。高藤武馬さんの話を聞くと、「方言」という雑誌の企画を持ち込んだのは岩淵さんらしい。おそらく静岡高校で東条(操)先生の教育を受けて、方言の重要性とかそれに対する関心はほかの高校生よりずいぶん強かったと思うのです。

国語研究所で、第一研究室は方言を必ずしもやるのではないけれども、方言もそこで必要だというので、結局、方言と話し言葉と分かれたということじゃないですか。

野元　地方研究員を置いたのもそうですか。

柴田　そうでしょう。最初にああいうものを置いていまだに潤っているというか、あるいはお荷物になっているか、どっちか知らないけれども、あれはほかの研究所にもないでしょう。

野元　ないですね。

柴田　あれは地方の研究者をずいぶん刺激したし、いい制度じゃなかったのですか。実質上はずいぶん酷使しただろうと思うけれども。

野元　酷使したんじゃなくて、まだしているのかもしれないけれども……。(笑)

柴田　まだまだときどき昔の名前が出てくるからね。最近の年報を見たら、「岩井隆盛」なんて名がまだ出てくる。

野元　八丈のK図表というのがあって……。

柴田　あれは楽しんだんですよ。丸山(文行)、高田(正

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

治）なんですよ。
野元　高田研究所の……？
柴田　ええ。高田君は丸山さんのあれを受けて書いたんでしょう。あのアイデアは丸山さんでしょう。だから、何か変な……。
野元　ぶら下がっていて、起重機みたいな感じの……。
柴田　あれは丸山さん、楽しんだのか、楽しまれたのか知らないけれども。あれは統計ではないけれども、一種のパターンで表現しようという考えだから、ちょっとつながっているでしょうね。しかし、巻末の方に文献目録があったり、語彙表があったり、あのあたりは古色蒼然としている。

いつか研究所の所員会議のときに、私は平井さんにやられたよ、「八丈島の言語調査」という書名は「八丈島」の調査なのか、八丈島の「言語調査」なのか、どっちだと。つまり八丈島を知るために調査をしたのか、言語調査ということを八丈島でやったのか、多少屁理屈ですけど、そういうことをいわれたことがあります。おそらく「両方ですよ」と答えたように思いますけれども。

八丈については、私はずいぶん国語研究所にサービスしたと思いますよ。なぜならば、初年度に成果が出るはずないでしょう。八丈も、中村さんのそういう話があってやっただけだから、私は、報告書にしなきゃならないとか、したいというふうに全然考えてなかったのです。12月の終わりか1月ごろ、斎藤さんが、「予算があるからどうしても出さなきゃいけない。命令をするから、20日休んでいい」というのです。それで私は、20日ぐらいお寺の本堂に座ったきり書きに書いた。

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

野元　3月までに本にしなくちゃいけないわけでしょう。
柴田　実際に出たのは4月だと思うのです。しかも入札しなきゃいけない。そうしたら、安く入れたところは印刷所がどこだかわからない。相手は、家へ行くと普通の家なんです。その人がどこかの印刷所へやらしているわけです。それで、校正のときにもずいぶんその人と接触したけれども、印刷所はついにわからなかった。文部省機関としての国立国語研究所が、一番安いところにやらしたということです。だから、印刷としてはずいぶんまずいんですよ。
野元　紙もよくないし……。
柴田　紙はもちろんですけれども、それは安けりゃいいということでしょう。その点で私は斎藤さんにはずいぶんサービスした。あれで斎藤さんはいい点稼いだと私は思う。

また、斎藤さんはあのころからなかなかやり手でしたから、白河の調査に行ったときも、市民相手の調査をやるからといって、白河の新聞記者を集めて一杯飲ませたんです。そんな知恵なんか私はなかった。平等に呼ばなきゃいけない、一斉に呼ぶということのために、3～4人だろうと思うけれども、飲ました。そういうことを斎藤さんはやってくれました。
野元　その後の調査では、そこまで庶務部はやってくれませんね。
柴田　庶務部長だよ。斎藤さん、特別じゃなかった？国文卒業だし、そういう意味では岩淵さんとも近い。それから、あの人は法政大学に夜通って、ときどき所員の島崎稔君の教育を受けて、ついに法科を出たわけでしょう。

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

それで文部次官まで行っちゃったんだから、国語研究所であの人は勉強していたんじゃないの。
野元　本省にいたら大学に通えなかったかもしれない。
柴田　本省にいたんじゃね。ちょうどいいときにいて、新しい研究所でそういう仕事をした。私が斉藤さんにサービスした1点というのは、0.001ぐらいの1だろうけれども、すごくサービスした。
　私は最初断ったんです、とても20日や1月でそんなリポートがまとめられないからといって、どうしてもほかにないから、ちゃんと出版費が来ているんだから返すわけにいかないということをいわれて、それをまともに受けたんですね。それで、島崎(稔)君とか山之内(るり)さんとか私とか……。北村君はそのときどうしていたかな。
野元　病気だったかもしれないですね。
柴田　ともかく3～4人休暇を命ぜられて、私は座ったきりで書きました。いまとってもそんな力はないね。
野元　後ろに、いままでの八丈島の方言からの語彙表があるでしょう。ああいうのも、そのときにだれかがやったわけですね。
柴田　それは島崎君が主体だった。分担はあまり考えない。全部ともかく私が文章にしたことは記憶にありますけれども、山之内さんがどの部分をやったかということは知りません。
野元　柴田さんは、その後は白河と鶴岡の報告書は……。
柴田　鶴岡の場合は全部じゃない。大体やりましたけれども。八丈のときは私の文章で統一したと思うのです。
　その当時大変だったですよ。知ってる？山之内さんの

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

直訴事件？

野元　知ってますよ。女性であるゆえに調査に連れていかないとは何事かということでしょう。

柴田　「それは私だけの問題ではない、将来の問題だ」といって西尾（実所長）さんのところに直訴した。西尾さんに呼ばれて、「こういうのが来ている」といわれて、私は「旅費さえ出れば差し支えありませんよ」といったんです。それで山之内さん、行ったんですよ。

野元　だから、私が入ってから初めから参加した調査というのは、上野の敬語の調査ですけれども、あのときも山之内さん、調査員になって来ていました。

柴田　それ以後は何ともなくなったわけです。

野元　何でもないんだけれども、私が驚いたのは、寝る部屋も男性、女性みんな大ぜいで一緒なんですね。それはきっと柴田さんが、そういう直訴を受けたから、これは平等にしようというのでしているのかなと思ったんです。

柴田　そういうゆとりはないんだよ。

野元　われわれと同じ部屋ですよ。

柴田　大きい部屋でしょう。それはそういう部屋一つしかない。

野元　いまそんなことをしたらまた突き上げを食う。（笑）

柴田　だんだんむずかしい世の中になってきた。私はそのとき、「構わないよ」といって、それこそ女性解放に多少力をかしたと思っているけれども。

野元　いまじゃとてもとても……。

柴田　また、山之内さんという人がそういう人だしね。

野元　平気な人ではあったんですね。

統計数理研究所

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

柴田　平気だし、またそういう意識の強い人だから、それをはねのけたら大変だよ。しかし、西尾君や岩淵さんはおそらく困ったんじゃないですか。

野元　岩淵さんは古い人だから。

柴田　山之内さんは私には一言もいわなかった。そぶりも見せなかった。あの人はしゃべらない人なんですよ。いまでこそよくしゃべりますけれども、1日一言もしゃべらないでやっていたから、私には何にもそんなことはいわない。そんなことどころか、ほかのこともいわないんですから。朝「おはよう」といっても、頭を下げるぐらいで、「おはよう」という日本語を出さなかったと思うな。

野元　私は、同じ部屋にいたのは驚いた。(笑)

柴田　それはニューフェースだから。われわれは24年にあれしているから免疫になっている。

　山之内さん、仕事もずいぶんやりましたよ。いまだにそういう気持ちが残っていて、東大で雫石をやったときに、近くだからやって来て、「少しやりましょうか」といってやってくれた。気持ちが非常に若いですよ。